蕚はツルニンジン屬 (*Codonopsis*) の持つ一特徴であらう。

○ハブテコブラ追記 (前川文夫)

本誌 20： 120 (昭和19) に久内清孝氏がオホケタデを本草時代にハブテコブラとよんだという記事を書かれた。面白い名前なのでその後見つかると書留めておいたが德川時代にはかなり一般にも使われ同時に數種の植物をさすかの様に見えて來たのでこゝに記して御參考に供する。

カプテコプラ，植物學雜誌 6 p. (371) (1892) に長野菊次郎氏がオホケタデの筑前方言として記す。少くとも明治年間には通用していた名であることがわかる。

ハブテコプラ，カブテコブラ，蘭山の啓蒙 31 にキササゲに宛てゝいる。

ハブテコブラ (紀州若山，雲州)，ハビテコブラ (熊野) ともにゴシユユを指すと同じく啓蒙 28 にある。

habite-kobura. Siebold et Zuccarini, Fl. Japonica: 50 に *Boymia rutaecarpa* (ゴシユユ) の條に和名としてこの語あり。

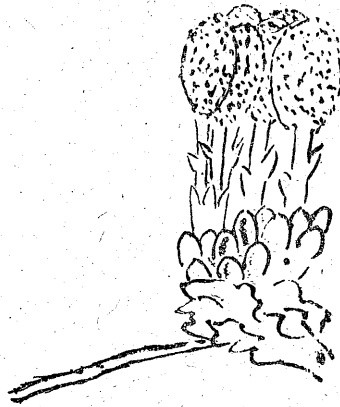
Cap di Cobra nomine lusitanico. Thunberg が Flora Japonica: 269 (1784) に *Croton acutum* Thunb. を記載し，長崎に栽培，ポルトガルより渡來と記した條下に，その日本名として上記の名と附記とがある。このものは今の何かわからないがどうやら渡來した名の變遷がおぼろげながらわかるように見える。

○導管內のラセンが糸になつて出て來る二三の例 (前川文夫)

中將姬が機を織つた原料のハスはあまりにも有名だが，短かいものならば二三ある。自然にある時節になるとらせんがほどけて白い糸となるのはモクレン屬の種子である。熟すると例の朱紅色で扁球形の種子が不規則なあまり氣持の良くない恰好の果實からぶら下がるが，この時のらせんの糸は相當に丈夫だし又長いものは 1 cm 以上もつゞく。これは胚柄內から出たものである。葉では柄を折るとよく出るものがある。子供達はこれを知つて居て柄をこまかく折つていくつもぶらさげて遊ぶことがある。ドクダミは可成よくこの糸が出る。タマアジサヰでも出て來るのに氣がついた。ミヅキはそれよりもよい例であつて相當長いものがとれるが，これは小倉謙教授から先年日光で敎へて頂いて知つた。山崎敬君からは先日サンゴジユの葉で子供の時遊んだと聞いた。搜すと存外例があると思ふ。肉質の柄で曲げるとピチツと折れるものでないと糸がつゞて來ないやうだ。導管內の螺旋狀の肥厚の說明によいし，又こんなに細くて均一の太さの糸は何か特殊の用途でも見附かるかも知れない。

○本邦產ツチトリモチ屬の最古記錄 (津山 尙)

日本內地フローラにツチトリモチ屬が確立されたのは，明治16年(1883)大久保三郎氏の天城山での未熟品の發見に次いで，其前後に牧野富太郎先生が土佐で完全な標本を採集されてこれを東京大學に送附され，後明治 39 年 (1902) *Balanophora japonica* Makino なる學名が與へられた時に初まるのであるが，一方琉球フローラでは英國 Kew

に於ける C. Wright 氏採集の標本の鑑定の結果が伊藤篤太郎博士により Journ. Linn. Soc. Bot. 24 卷(1887)に報告された時に初まる。所が德川時代にも既にその記錄のあつたことは，牧野先生も既に本誌5卷に紹介されてゐる如く，琉球のものに就ては質問本草外篇卷 1，第 12 枚目の「蛇菰」(天明元年，1781編)，及び越中立山のものに就ては本草通串證圖第 4 卷 7 及び 11 丁の「鎖陽」(嘉永 6 年 1853 出版)の圖入りの記述の二者が知られてゐる。そして今こゝに別の古記錄を紹介したい。それは平井宗源政恒氏の直筆になる寫本「花弁小錄後編」の「山土餅」に關する次の記事及び圖(縮少)である。

“土山餅　山寺坊主　土佐　初冬暖地の深山落葉の下に生ず。形略ぼ草蓯蓉に類し，而して其根は黃色，山藥の如く，採つて黐を製す。根上の鱗甲は莖と共に黑色にて，莖頭は毬を成し，黃粉を着くるが如し。”(假名交り文に直し，句點を附す。草蓯蓉はハマウツボの類，山藥はヤマノイモの類を指す。黃粉は葯又は花粉のこと。) この文章はよくツチトリモチ屬 (恐らくは *Balanophora japonica* ツチトリモチ) の實體を說明して居る樣に思ふが，黑色とあるのは，送附された稍ゝ古い標本によつたものであらう。平井氏の寫本の「前編」には文化 4 年 5 月 5 日 (1807)附の序文があるから，それを去ることの遠くない時代に記述されたものであらうと推定する。これは內地に於ける最古の記錄であらう。土佐方言「山寺坊主」に就ては既に牧野先生も本誌 5 卷 272 頁に紹介されてゐて，土佐の一地方で小供達が根莖から「とりもち」を製することを述べてゐられるが，この記錄によつて，この名と用法も亦由來が古いものであることが判る。

○マレー半島の日本科學者達 (津山　尙)

戰時中南方に派遣された科學者の moral を歐米人は如何に見てゐるか，こゝにシンガポール植物園の E. J. H. Corner 氏が Nature 誌 158 號 (Jul. 1946) に書いてゐることをその一例として紹介したい。それは Symington 氏の大著 Foresters' Manual of *Dipterocarpus* の出版に關して郡場寬，德川義親，田根中館秀三，羽田彌太の諸氏が，その草稿の發見，安全のため自らの運搬，英人の協力による校正，出版費用の個人的負擔に到る迄戰時中のひどい困難と偏見と戰つて遂行した科學への奉仕を讚美したものである。この爲この著は無事に Malayan Forest Records 16 號として立派に出版され戰禍から助けられたと言ふのである。そして氏は次の樣に結論してゐる。

In the interest of science, one must distinguish carefully between the ‘Japanese’ of popular conception and the Japanese men of science, who in Malaya, at least,